CLOSE UP クローズアップ

長屋再生の達人、今を生きるまち創造

からほり御屋敷再生複合ショップ「練」にて（2009年1月）

戦災を免れた長屋や町家、石畳の路地、木製の引き戸や格子。空堀商店街界隈には、懐古の情をかき立てる町並みが広がる。その一方で、くるっと振り返ると新築マンションが空高くそびえ立っており、まさに新旧が入り交じる独特のまちである。「古」に固執するのでも「新」を推進するのでもなく、双方の共存によって今を生きるまちが創造されている。その仕掛け人が、「からほり倶楽部」の代表理事、六波羅雅一さん（48）である。

◇長屋に魅せられて◇

約20年前に建築家として独立。たまたま長堀通沿いのビルに事務所を構え、10階から空堀のまちを見渡し驚いた。「戦争で焼けなかった2階建ての木造建築が密集していた。まだこんなところが残ってたんやとびっくりした」。買い物などで地元の人たちと接し、人間味を帯びたこのまちに一気に引き込まれる。

次第に、住人同士の交流、つまり長屋文化に興味を持つようになる。「近所の人の家族構成なんかも皆知ってはる。ほかにも発見がいっぱいで、予測をはるかに超えるものがあった」。しかし、この長屋文化も古い町並みも、姿を消す方向を向いていた。

「なんとか残していくことはできないか」と思ったものの、まちづくりのノウハウを知らない。「いろんな分野の人の意見や住人たちの真意を聞いて、自分には何ができるか知りたい」と2001年4月、約40人に集まってもらい会合を開いた。これが「空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト」（からほり倶楽部）の出発点となった。

◇「新」と「古」の共存◇

集まったのは、建築家やまちづくり研究家、地域住民ら空堀のまちに愛着を持つ有志の面々。「美しく歴史のあるまちの保存・再生」「イキイキした活力あるまちづくり」「新旧世代、文化の共生」の3本を柱に据え、まずは空き長屋の入居促進から始めた。

しかし大家や住人らは長屋をお荷物と感じていた。「利用価値がないと思っている彼らに長屋の価値、継承の意義を伝え、経済的にも成り立つような方法での再生を促した」。これまでに約10棟（40軒）の長屋等を再生してきた。

2002年には明治時代の長屋を再生し、複合ショップ「惣」をオープン。ほか「練」「萌」など次々と手掛け、雑貨屋やカフェなど個性的なお店が入店している。徐々に“レトロなお洒落スポット”としてのブランド力も高まり、注目を集めるようになる。06年には地域と協力しながら魅力ある居住地の形成を図っていく大阪市の「HOPEゾーン事業」の指定も受け、力を得た。

◇持続可能な方法で次世代へ◇

発足の年から毎年10月最後の週末には、アートイベント「からほり街アート」を開催している。公募で集まったアーティストがまちのあちこちで作品を展示し、来場者にはアートだけでなくMAPを見ながら散策も楽しんでもらおうという企画である。また、歴史や文化もきちんと継承していこうと、同地にゆかりのある直木三十五の記念館を設立した。

これまでの活動を振り返り、「背伸びして、すごい冒険を重ねてきた。自分の中でもやりすぎだし、できすぎ」と手応えを噛み締める。「気がついてみれば持続可能な方法でやってきている。僕がもっと頭がよかったら最初からそれを認識してやっていたんやろうけど（笑）」

10周年を区切りに、代表の役は後進に引き継ぐことを決めているという。その日まであと3年。後継者育成と同時に、災害時の“減災”に焦点を当てて勉強中だ。「何か意識して、あるいは活動しながらまちづくりを進めていかなければ必ず衰退していく。だから僕らは続けなあかん」。自分の使命に徹する。

（文・江中咲紀／写真・高島悠介）

●町屋再生複合施設ー燈ー
3/6（金）よりフリーマーケット開催（※“6”のつく日に開催）　くわしくは http://www.machiya-akari.com/dnn/
●複合商業施設ー練ー
3/15（日）空堀長屋「住まいと有者意識調査」報告会を開催　くわしくはからほり倶楽部ホームページまで

プロフィール

「からほり倶楽部」代表理事

六波羅（ろくはら） 雅一（まさかず）さん

1961年大阪市生まれ。82年大阪デザイナー学院建築デザイン科卒業。松野八郎綜合建築設計事務所などを経て、88年六波羅真建築研究室開設。2001年空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト（からほり倶楽部）発足、03年から代表理事。第8回「なにわ大賞」大賞受賞（05年）。空堀でのプロジェクトを応用し、大阪府内各地で長屋を再生した複合商業施設を手掛けている。
<からほり倶楽部ホームページ>
http://www.eonet.ne.jp/-karahoriclub/